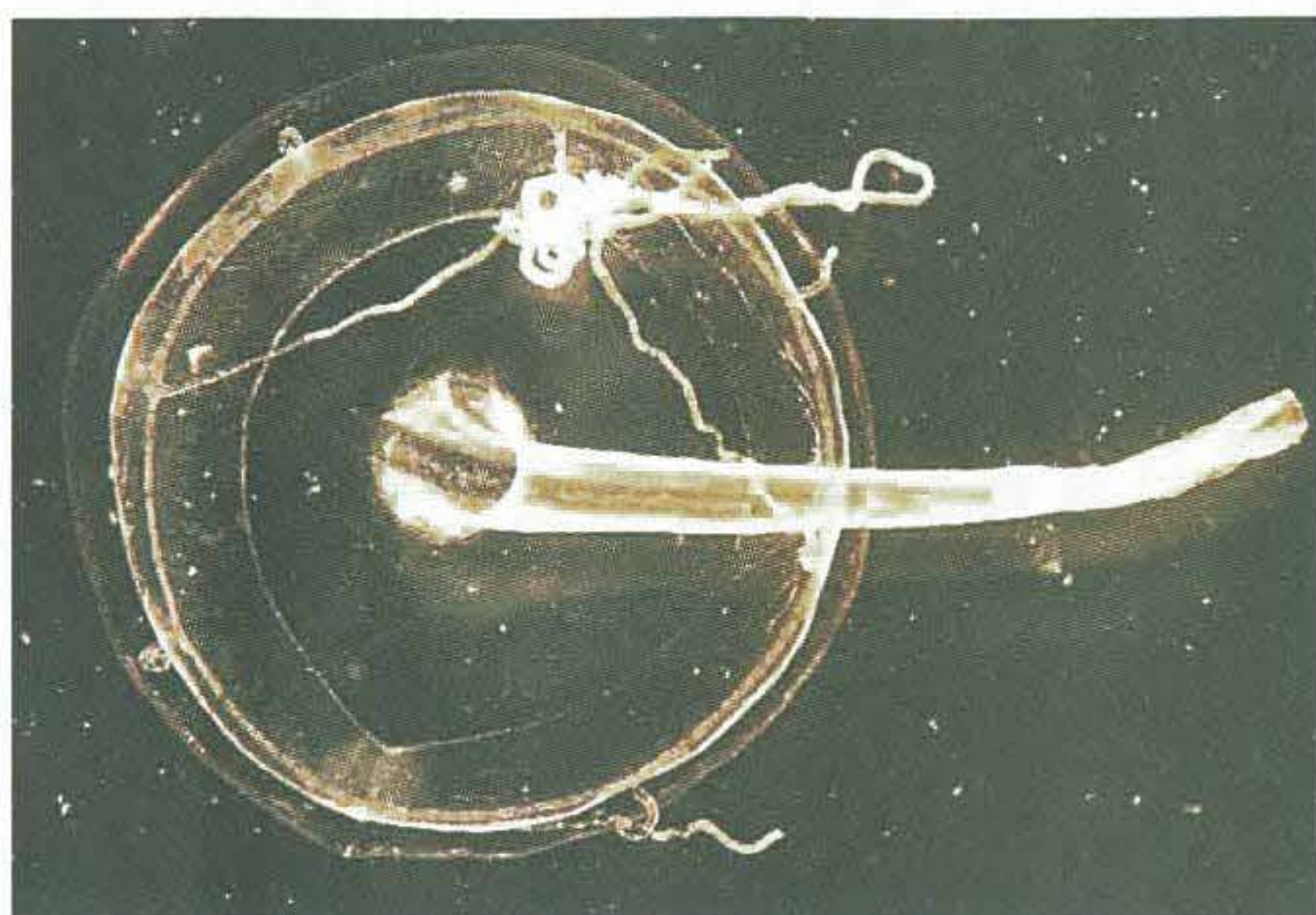


カラカサクラゲ



長い口柄を持つカラカサクラゲ

た刺胞(しほう)の毒はそれほど強

ゲの触手の装填

(そつてん)され

る。カラカサクラ

ゲの触手の装填

た刺胞(しほう)

の毒はそれほど強

長い口柄を持つカラカサクラゲ

久保田 信

16



カラカサクラゲという名前が示すように、傘の中央から長々と垂れ下がる口柄を持つ

傘縁には8本の触手と8個の感覚器がある。この個体はまだ小型で未成熟なので、4本の触手は短いままである。どの触手の根元にも膨らみがまったくな

ことが、このクラゲの特徴になっている。
口柄は細長くてスマート、その先には四つの口唇を備える。口柄は象の鼻のように動かせるが、伸縮自在なので、透明な傘の内側に収容してしまつこともある。傘径は30ミに達するが、写真の個体は8・5ミとまだ小さい。

くないが、大発生すると、養殖いけすの魚類に刺傷の被害を起こすこともある。
口柄の基部の胃腔から十字状に走る4本の放射管に加えて、成長すると傘の縁から傘頂へ向かって伸びる細いすじになった求心管が多数形成される。栄養を効率よく体中に回す構造へと発達させるわけだ。

カラカサクラゲが属する硬(かた)クラゲ類は、全種とも外洋性で、海底で固着生活を送るポリプ世代はない。つまり、受精卵がそのまま海中でクラゲに変態、成長していく。生涯にわたってプランクトン生活を送るという点では、多くの剛(こわ)クラゲ類と共通した特徴を持つが、幼体の時、他のクラゲ類などに寄生することはない。

カラカサクラゲは、本州中部以南のインド-太平洋、大西洋、地中海の熱帯から温帯海域にかけて世界中に広く分布する。外洋性のため、飼育展示は難しく、長生きしない。
(京都大学准教授)